

まんじ語録(その一)

新井 宏

社員は一人も止めさせない、というのは、言葉としては美しいが、殺されるか半殺しにあうか、どちらかを選べ、というに等しい選択だった

(75号、瀧澤中、茜色の翼)

酒は古詩の時代からよく詠まれたが、茶は中唐以降に詠まれるようになった

(75号、鯨游海、潮騒録)

父祖の地忘じがたし……しかし、失望の二字を記録する結果を残し、都市化に失なわれようとするものへの単なる感傷旅行に終わった

(75号、大和禎人、わたしの「父帰る」)

因みに男ものさる股はえて股と呼んでいて、……左右の布が重なり合っているだけで、踏んばれば自然に

布が割れて用がたせたのです

(75号、鈴木昭三、ねずみ小僧丸桶)

あのパイナップルは不思議な植物だ

あれは珍獣アルマジロの変異かも知れない

(76号、青木昭成、その頃あれはアルマジロ)

わかりきったことだが、戦闘は攻撃に出ない限り勝ち目がないということである

(77号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと)

理論や学問は完成度が高ければ高いほど、現実に運用するといびつになる

(77号、瀧澤中、大山巖外伝)

鷹狩りの最高の獲物であるツルが一羽もとれないと、
將軍の御機嫌を損じるのを恐れて、百姓たちは鶴代とい
う野生のツルを餌付けする場所を考え出した

(77号、太田和貞、笹ヶ崎村)

異人さんはね、めっぼう女には優しくてね、みんなこ
こへ来たては気味悪がついてた子がね、今じゃ、誰もが
異人さん相手じゃなきゃ嫌だっていつているほどなんだ
よ

(77号、相原精次、開港・港崎心中)

その静けさというものは、静寂とか、シーンとかいう
ような生やさしいものではなく、『音のない異界』へ自分
だけが閉じこめられてしまったような、異様で、凄絶な
孤独の世界なのだ

(77号、三戸岡道夫、老春繚乱一幻聴二)

艶なるものの本質、根本にあるものはだ、ヌードなん
ぞと云うものよりじゃ、麗しい人が正装して端座してい
る姿にこそあるものじゃぞ

(77号、鯨游海、潮騒録)

たまたま下賤はこの男だけかも知れぬ、だが、この輩
がいまは正義をかざしている、それが恐ろしい

(77号、大和禎人、勤皇トライアスロン)

“いいかげん” っていうのは、すばらしいことなんだ
よ。瑠里だっていつも使っているじゃないか。ママに
“お湯の湯加減は？” て聞かれたら、…………

(78号、森実与子、月の海辺の人形たち)

妻を伴い、私はその時

おおかたの人達がする振舞いでいた

落ち着きを持たず

もちろん仕事を持たず

(78号、青木昭成、旅行)

その間、大名行列のような行列の形式をとったのは、
松平村を出てから東海道までの間と、江戸に入って品川
の宿から麻布の屋敷までの間だけで、途中は主従八人だ
けの旅だったことがわかる

(78号、三戸岡道夫、御参府中日記のこと)

私が物心ついてからのことを、ずっと思い返してみる
と、どうも、最初の思い出は、寝小便だったように思う

(78号、紙透寛夫、紙透小太郎の一生)

結句詩魔とは、詩を異常に好み、そのとりこになった
人を云う。ここでは作者の私を指す

(78号、鯨游海、潮騒録)

能力の無い者が生き残るためには、中立・傍観しか無いのだ

(79号、瀧澤中、さち)

家慶の正室は……文化十年に竹千代を生んだ。正室が第一男子を産んだことは稀有なことであった

(79号、太田和貞、笹ヶ崎村)

女は大きな瞳にいっぱい悔し涙をためて、刀を静かに、い草の臭いのする畳に置いた

(79号、瀧澤中、さち)

かつて、実朝殿は海に乗り出そうとした。痛ましくも傷ついた歌人の魂は、ただひたすら大波のなかに、雨滴のように漂い、戯れようとしたのではないか

(79号、島津隆子、北条時宗とその時代)

俗説には権威がない。しかしより合理的であれば、何れは定説にとつて替る。正論は権威に勝る

(80号、鯨游海、論語の解釈・二千年の誤りを糾す)

世の中もその頃になると……秘画にも飽がきた、次

は動くものに食指がのびる。当然のことである。浮世絵師に代わって、人形師の出番である。どんな有名な浮世絵師でも、裏では必ず秘画の製作にいそしんでいたように、人形師たちも裏ではからくり組人形の製作をきそつていた

(80号、三戸岡道夫、人形師奇譚)

泥めんことは、江戸時代の中期……に登場し、子供のおもちゃとして一文駄菓子屋で売っていました。今のめんこは紙ですが、その頃は粘土の素焼きでした

(80号、紙透寛夫、泥めんこ)

むしろ、夫がもつと不細工であつたらと思うくらいです。醜悪なら、きつとそれを埋め合わせようとして、気がきくとか愛嬌があるとか、面白いことを言つて笑わせるとか、何かしらユニークな一面を持ち合わせているはずです

(80号、森実与子、可もなく不可もなく)

そして、しばらく無言でいたが、

風が二人の頬を撫でた時、「明日、だ、そうだ」

ポツリ、と立花が言った

(80号、瀧澤中、空に祈る)

人の一生はまるで樹木の下草のようなものだ。この庭の水引草のように、小さな花をつけてひっそりと咲いても、一陣の風が吹けばあとかたも無くなる

(80号、島津隆子、北条時宗とその時代)

……全ての動物は、性交のあとに悲し……

(81号、森実与子、六月の雨)

いつの時代でも、命令する者はいとも簡単であり、命じられる立場は苦しい

(81号、島津隆子、北条時宗とその時代)

何か気の利いた話でもしなければ、そう思うとあせりだけが先走り、逆に、思うような言葉が出てこない。喉はカラカラに乾き、体は固くなっていた。心がどきどきして、ひたすら前を向いて歩くことだけしか、頭になかった

(81号、森実与子、六月の雨)

テレビは、大体三十分か一時間、映画は二時間、食事も一時間、山手線一周は一時間四十分、セックスにしても、一時間以内で終わる。結婚だけが死ぬまでなんておかしいし、契約としても長すぎるわ

(81号、森実与子、六月の雨)

私は、国家意識のない素人に国政を預ける勇氣はありません

(82号、瀧澤中、政治家の条件)

世の中の人たちは書物を読む時、まず文章を読んでから、その後で内容を理解しようとしています。しかしわたくしはまず最初に、天地大自然のどの道理に当るのであるうかと考える

(82号、三戸岡道夫、報徳の人二宮尊徳)

人に善行を施せば自ずから我が輩の心は爽快になり、
……

(82号、鯨游海、潮騒録)

わたしは詩人ではない

これが、詩であるわけがない

そう言いつつ、詩を創る

(82号、青木昭成、詩 あどりぶ)

多少の罪悪感が無いでもないが、金融界とはこんなものだ。この時代に困った奴に金なんか貸す方が無能だ

(82号、中泉聖司、悪流修羅)

では、本当の意味で家康から学べるものとは何か。それはズバリ、下請け企業から脱皮して独立を果たすという、ただその一点である。

(83号、瀧澤中、徳川家康)

物を担保に金を貸すのではなく、人の心を担保に金を貸すのである。

(83号、三戸岡道夫報徳の人二宮尊徳)

「誰もおらんのか」そう声を荒げると、「よし、それならは本官が行こう」

(83号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風

特別攻撃隊の人びと)

未だに利己的で無謀な論理に気が付かない、この幼稚な発想の男が経営管理者として認められていることこそが不幸を生む今の時代なのだろうか、悪流に気付かないのも現代なのだ

(83号、中泉聖司、悪流修羅)

自分は営業が下手くそだと思っている人にこそ、私は商売をやってもらいたいのです

(84号、瀧澤中、マヨネーズの神様・中島董一郎)

神様は、予知能力しかないってこと

(84号、森実与子、お告げ)

クールな目で男を見てしまう性癖。そして自分の内面に、他人にズカズカと土足で踏み込まれることが何よりも鬱陶しくて、一人でいる方が気軽に感じられたのだ

(84号、森実与子、お告げ)

『桜花』も『回天』も、目標に命中する直前に搭乗員が脱出することのできる装置をつけるという条件で承認されたのだが、そんなことが不可能なことは誰もが承知で、結局は建前に終わり……………

(84号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風

特別攻撃隊の人びと)

「監獄は人生の大学である」大野はその生涯、三回も獄につながれている

(85号、瀧澤中、本には書けなかったこと)

賄賂の形態はどう変わってきたのか。結論から言うとう、明治時代の「単発型」から、現代は「恒常型」「連続型」になった

(85号、瀧澤中、本には書けなかったこと)

つまり、これまでの出撃は九死一生の「決死行」であつて、十死零生の「必死行」ではなかつたのだ

(85号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと)

あの雪印が……何たる事か狗の肉を売るのに牛の頭の看板を懸げていたとは

(85号、鯨游海、潮騒録)

この宇宙を造つた天地創造の神が、そんなに簡単に、いろいろな人間のところへ降りてくるのだろうか、それはまやかしの神様だ

(86号、森実与子、お告げ)

「止めよう」と思つた気持ちは、同時に、「止めてやれ」という気持ちにも通じていた

(86号、三戸岡道夫、哀愁武士道)

疱疹の治療法がはっきりしていなかつたこの時代に、赤い色にすぎた親の姿がかわれであり、その親心が悲しい (86号、太田和貞、黒船)

関係の無い民間人を殺して刑務所に入れば、自分の組からも相手の組からも殺される心配は無い

(86号、宅見勝弘、都市銀行『爆発物処理班』)

木洩れ日に光るしどけない御許丸の白い肩や胸が、赫く燃え立ち、いつまでも網膜に浮かんで消えないのだ。その秘色めいた像に、いつしか衣を解いた裸身が重なり、今にも現実のものとなつて、手の届きそうな所にあることを竜丸は実感する

(86号、島津隆子、和泉式部譚)

散華のときが長引けば長引くほど、生還のたびに頭を擡げてくる生への執着が抑えきれなくなつて、地獄の日々に絶えつづけねばならず……

(87号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと)

自省せよ矛振りかざし示威をする
傲れる思想パクスアメリカーナ

(87号、石黒修身、行雲流水)

確かにバブルにより金融機関と大半の企業・個人が資産デフレで体力を消耗していたが、国内の需給アンバランスは「バブルに関係なく以前から」顕在化していた

(87号、隆恵、日本の金融システム再建への提言)

換言すれば、金融機関は被害妄想症と自閉症という強度の心身症を患っており、この自然治癒を日本経済は待つ余裕はない

(87号、隆恵、日本の金融システム再建への提言)

それが北の方の最後の抵抗でもあり、せめてもの女の意地でもあるように、わざと帥宮に寄り添って文武百官への顔見世を行った

(87号、島津隆子、和泉式部譚)

酒も琴も未だ楽しんでいないのに既に詩人であるこの私はすっかり酔って了った

(87号、鯨游海、潮騒録)

許慎の時代は甲骨分も金文も出土が稀だったのに対し、二十世紀になり甲骨文や金文が大量に発見されたお陰だと白川は許慎を庇う。二千年を経て学問が一步前進した

(87号、鯨游海、千篇萬律)

電撃結婚した若い歌手が「女は決断する度に幸せになる……」と告白していた

(88号、森実与子、遠い町)

だいたい、遊園地でジェット・コースターを好むのは

男性より女性が多いという

(88号、瀧澤中、七人の代議士)

であるならば、初めから醒めていることこそ、放心と悲哀から逃れ得る唯一の道と思われま

(88号、島津隆子、和泉式部譚)

吾が短歌にいまひときわの深みなし
ただ黙然と名歌集繰る

(88号、石黒修身、行雲流水)

一藩の君主が決意の脱藩を敢行した。あろうことか、紛れもなくそれは事実であり、戊辰戦争に際し、自ら下した決断であった

(88号、大和禎人、藩主脱藩)

通常任務の爆撃行なら偵察員は必要であるが、特攻は零戦が一人なのだから艦爆も一人でよかったはずなのが、生死をともししてきた組の絆は条理を超越していた

(88号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと)

自分が死んだ後、こんな女のことなど誰が思い出してくれようか、せめて生きた証にものを書くことの意味を

想い、今こそ情熱を傾けて書くことだと、式部は実感したのだ

(88号、島津隆子、和泉式部譚)

わしは仏罰などは信じない。そもそもこの世は、正法などでは救えない。この世は外法によつて救うしかなないのだ (89号、三戸岡道夫、妖星)

ためらいつつ出す初めての無料パス
どうぞの声にホツとして乗る

(89号、石黒修身、行雲流水)

ところが、映画にまつわる場所や旧跡は何もないのだった。映画は全編、米国ハリウッドで撮影されたものだからである

(89号、大和禎人、モロッコ幻想)

正文を何語にするかとの交渉がおこなわれなかつたため、……：双方が正文と考えた条約文には、自国側の署名のみという皮肉な結果となった

(89号、太田和貞、黒船)

女というものは自分の美しさのゆえに犯される行為ならば、それがどんなに悪徳に満ちていても、自らを許し

てしまうものか

(90号、島津隆子、妖花藤原薬子)

利益は形としてはつきり眼に見えるものじゃない。……：たとえ計算し直してみたつて、その数字もやはり計算されて出てきた数字にすぎないのだ。どちらも数字である。どちらが正しいという根拠は、どこにもない。

『正しいと信ずること』、それが正しいということだ

(90号、三戸岡道夫、ソクラクレス)

はらからの計に急げども

連絡線とめて吹雪は佐渡に渡さず

(90号、石黒修身、行雲流水)

昭和二十二年二月十三日……：

憲兵大佐 中村通則 死刑 絞首

中尉 紙透小太郎 無期

曹長 市橋重男 無期

軍曹 笹倉林治 死刑 絞首

軍曹 岡崎和明 無期

……：有為の笹倉、一条、風戸の極刑は余りにも残酷なり (90号、紙透寛夫、紙透小太郎の獄中日記)

すると、二糧から三糧ぐらいの、かなりの量の縮れた

毛髪が、和紙に平らに貼りついていて、私の吐く息に、その一本一本が、まるで生物のようにふるえるではありませんか

(90号、鈴木昭三、さもないさん)

カエデの老木に与えたゆうべの残飯が、猫の知恵と生きるための執念で食われている。老木はこれを拒む術を持たないし、自分を犯す何ものにも桐喝を与えるための声も出ない

(90号、中泉聖司、貸しはがし)

おどろいて眺め廻すと、白鳩たちもじつとこちらを見て据えていた。すると、一瞬その数十羽の白鳩が、特攻で散華した先輩たちの蒼白な顔貌に変わった

(90号、千坂精一、白い鳩)

孤独や独善、あるいは仲間うちにしかな通用しない合点に陥りやすい気質は、その極小の詩型を意識すればするほど頑なになるに違いない

(90号、青木昭成、芭蕉のこと)

品物は自分の金で買って触って時には使って見て本当の良さが解る

(91号、忠内正之、古い物・遠い夢)

歴史は文学が作り伝えるものか

(91号、鯨游海、潮騒録)

無邪気な童女を装ってみても、お互いの奥深くには、触れればすぐにこぼれ落ちてしまう涙のしずくを隠しもっている

(91号、島津隆子、小町散策)

だから堺に二万貫を課したのは、二万貫の金が欲しいからでなく、それを機に、堺を自分の支配下に組み入れたいのだった

(91号、三戸岡道夫、妖星)

わたしも歴とした年寄りですからね。ことし、六十九歳ですからね。なんなら長崎産婦人科病院に私が入院して、その入院費用を母さんが払ってくれますか

(91号、太田和貞、丙午の女)

わたしは、『ボケるが勝ち』と思っているのよ

(92号、太田和貞、丙午の女)

重き賞受けし女らはうら若く

あつけらかんと感想を言う

(92号、石黒修身、行雲流水)

ムッシ桂木、奥さんは一人か

(92号、太田精一、遙かなるカメルーン)

好きなものは好き、嫌いなものは嫌いとは割り切った態度を、すつきりしていて、良いと思うのは、直接かかわりのない人々

(93号、島津隆子、小野小町物語)

情事はいつも拙く哀れである

(93号、島津隆子、小野小町物語)

上空で開く花火はあまり高く上げないほうがバランスが良い

(93号、吉田忠雄、春のミニ花火ショー)

入所者が逃げ出したら大変でしょう。……逃げ出す？逃げるのではなく外出するのです

(93号、鍋屋次郎、ボランテニア活動に携わって)

過去を現実につっ張ってみると、案外たいしたものではないのかもしれない

(93号、森実与子、錯覚)

前部族長の家の前の通りを挟んで左右対称に茅葺の小さな家が連なっている。左右合せて十軒余りある。桂木は始め小作人の家かと思った。ところがそれらはすべて奥さん達の家なのだ

(93号、太田精一、遙かなるカメルーン)

ここまで徹底して剽窃すると、剽窃が剽窃でなくなる
(94号、新井宏、まんじ語録その一)

